



今しかない

窓際で、A子は一人、弁当を開いている。

A子と私は、バレーボール部に所属している。同じクラスのB子とC子もバレーボール部に所属し、夏休み中は、体育館で一緒に汗だくになって練習した。

A子は、バレーボール部では一年生からレギュラーとして、先輩たちに混じって試合に出場していた。先輩たちが引退して新チームになってからは、エースとして練習試合でも活躍した。キャプテンになったB子も、一生懸命声を出してチームを引っ張った。

二学期が始まると、A子は学級委員に選ばれ、先生からクラスへの連絡や先生への報告、学級会の進行等をはりきってやっていた。

A子が学級委員に選ばれてから一週間が過ぎた。私とB子が廊下で話をしている前を、担任の先生から学級会の連絡を聞いて教室に戻ろうとしていたA子が通り過ぎた。その時、B子が突然、

「いい子ぶるなよ。」

と、言った。私は、その言葉を聞いてドキッとした。それは、誰だれに向けて言ったのか、はっきりとわからなかったが、私は確かにその言葉を耳にした。

その日の部活動を終えて、私はB子とC子の三人で家に向かって歩いていった。すると、B子が唐突に問い

かけてきた。

「最近のA子、生意気じゃない。今日も見ているだけで腹が立った。」

B子の様子を見てC子も、

「そうそう、この前も偉そうに注意してきたしね。ねえ、あなたもそう思わない。」
と、言った。私はどう答えていいかわからず、つい、

「う、うん……。」

と、こたえた。

次の日の音楽の授業で合唱隊形に並んだ時、A子の右隣にいたC子が右下を向いて、

「むかつく。」

と、一言ぶっきらぼうに言った。A子に聞こえるような、聞こえないような声の大きさであったが、すぐそばにいる私の耳にはっきりと聞こえた。

(C子まで、いきなり何を言ってるの。ちょっとやり過ぎだよ。でも、ここで私が止めに入ったら……。)

私は、何も聞こえなかったように振る舞おうとした。

それから数日後、教室のA子の机の上の隅っこに、『ぶりっ子』『むかつく』『ウザイ』等と書かれるようになった。そのたびに、A子は表情を変えずに、静かに消していた。



(A子は、何を考えているのだろうか……。)

私の目には、そんなA子の背後に黒い影のようなものが見えた気がした。

(あれは何だったのだろうか。目の錯覚だったのだろうか。でも、このままだと……。)

ふとB子の方を見てみると、B子の顔つきが以前と変わっているように感じた。私は、胸がしめつけられたように苦しくなった。

はじめはA子を避けるようにしていたのは私たち三人だけだったが、その後、A子と友達だと思っていた人がA子のもとから一人、二人と減っていった。

二学期が始まって、一か月が過ぎたある日の昼食の時、私は、B子とC子と三人で弁当を食べていた。B子はいつものように、大きな声で楽しそうにC子と好きなアイドルの話をしていた。

そんな中、A子はいつとも一緒に食べている仲間と食わず、窓際の席で一人で弁当を食べていた。女子のただならぬ空気を感じているのか、感じていないのかわからないが、弁当を食べ終わった男子が、大きな声を出して騒いでいた。

しかし、私には、窓際で一人弁当を食べているA子にだけスポットライトが当たっているように見えた。私は、A子から目を離すことができなかった。

(私だってA子のいい子ぶっているふうに見えるところは、あまり好きではない。その点ではB子と同じ思いだ。しかし、集団で無視していいのだろうか。誰だだって人には好き嫌いがあるし、気の合う人、気の合わない人がいる。だからといって、無視することとは別問題だ。B子は、私たちがしていることの重大さに気がついていないのかもしれない。それに、ここまで広がるとは……。)

十月末にある新人大会が近づいてきた。しかし、A子は、体調不良を理由にバレーボール部の練習も休み

がちになっていた。顧問の先生も、A子のことが気になっていようだった。

私にとって、何日も苦しい日が続いた。

新人大会を目前に控えた土曜日、私は朝早く目を覚ましたので、いつもより早く家を出て、学校に向かった。バレーボール部の練習の集合時刻より四十分程早く部室に着いた。そこには、一人で黙々と部室の掃除をしているB子がいた。私はB子に、

「おはよう。早く来て掃除をしているんだ。私もやるわ。」

と言うと、B子はうれしそうにうなずいた。しばらくの間、二人で黙々と掃除を続けていると、B子が、「私、今度の大会で勝ちたいの。でも……。」

と、つぶやいた。その時、B子から、今までに感じたことのない心の迷いが伝わってきた。

(今しかない、話さなければ……。)

